



いづみ

No.45

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 15



《冬の情景》

川名 義美

(2 ページに「作者の言葉」)

「冬には冬の楽しみがある」ー。ブリューゲルの「雪中の狩人」の中には、そんな想いが人々の生き生きとした生活と共に描かれています。観る人はきっとその絵の前で、様々な会話をするでしょう。できれば私の作品の前でも、いろいろな人がいろいろな言葉で、それぞれの想いを語り合ってもらえたらいいなあと思います。そのとき、作品は新たな価値を持つのだと考えるからです。

(川名 義美)

タイトル：「冬の情景」

設置場所：作者蔵

制作年：2010年

素材：カツラ、その他

サイズ：194×160×74 cm

連載 宮の森の四季 15

本郷新記念札幌彫刻美術館

ビュースポット

業務係 松島 幸和

当館の人気スポットに、記念館2階の通称「ビュースポット」がある。そこからは、札幌のビル群、そしてそれを包むかのような木々、山々の四季、宮の森の四季の姿を見ることができる。ところで、この欄のコーナー名でもある「宮の森の四季」は私たちにどんな福をもたらしてくれるのであろうか。

環境は様々な影響を我々に与えてくれる。周知の通りである。特に福祉の分野では、この環境を重視しているようである。例えば高齢者施設である。高齢者施設においては、レクリエーションが日課になっているが、目に見える形でこれに参加できない人も、そのレクリエーションの対象外とは考えていないようである。つまり環境を整える、快環境にすることもレクリエーションと考え、そのための工夫と考え方が求められていると聞く。孫の写真を置くことや住環境の飾りつけや、職員の笑顔等々である。つまり、環境を整えば、その力によってレクリエーションに参加し、さらには自らにあったレクリエーションを選択する、その一連の流れに高齢者の生き生きとした姿を描き、見いだすのである、と。

ところで、本郷新は小樽市春香にあった旧アトリエから見た石狩の眺望が気にいっていたようだ。自身も水彩・油彩に「石狩湾」という作品も残している。となれば、この宮の森のアトリエ（記念館）からも、存命であればきっと「宮の森眺望」などという作品を残したのかもしれない。ビュースポットから見て、そう思うこのごろである。

こむろ とおる
小室 達のこと

水上 武夫(元道立近代美術館館長)

「日本の銅像」(金子治夫著・淡交社)によると、国内にある銅像は三千点に及ぶという。どの国でも偉人は有名人、あるいは郷土の功労者などを称える銅像はたくさんある。わが国の場合、銅像は明治時代になって登場したとされる。その第一号が金沢市の兼六園にある「日本武尊像」だとされている。明治13年設置であるが、作者は特定されていない。

不思議なことに、銅像の人物(像主)はよく知られているのに、作者は忘れられている例が多い。仙台市青葉城址にそびえる伊達政宗公の騎馬像もそうである。この銅像を取り上げたのは、作者が私の郷里の大先輩だからである。

この銅像は昭和10年に政宗公没後300年を記念して宮城県をあげて設置したものである。制作者として選ばれたのが、地元柴田町出身の小室達であった。明治33年生まれで、旧白石中学校を出て東京美術学校に進み、若くして帝展入選を果たすなど新進気鋭の彫刻家だった。東京のアトリエから時速16^キで仙台に着く途中、沿道とりわけ県内に入ってから「さんさ時雨」の合唱で大騒ぎだった。

5月23日の除幕式に小室は作家としてあいさつ文を用意して出席した。しかし、名前は呼ば

れず、口惜し涙にくれた小室は、その夜、仲間の前でこのあいさつ文を読み上げたという。作家の地位は、その程度のものであったのである。

この銅像はさらなる受難を待つ。太平洋戦争である。昭和19年1月、金属回収令によって政宗公が「率先出陣」して一番先に溶かされることになったのである。作者の小室もその出陣式に招かれ、撤去に立ち会ったという。3年もの時間をかけて制作した作家の気持ちを思うと胸がつまる。

もう一つ災難一。戦後この銅像が塩釜市の金属回収所で見つかった。有志が買い戻そうとしたが、資金がない。やっと資金のメドがたった時、もう上半身しか残っていなかった。幸い、原型が郷里に疎開して残っていたので、昭和39年10月9日、再生なった銅像の除幕式にこぎつけた。見つかった上半身は仙台市立博物館の庭に移されている。めでたし、と言いたいところだが、戦争の無意味さもこの銅像たちは伝えている。

この話は、恩師の故後藤彰三先生の労作をもとにしているが、生前、先生は手柄を横取りする官僚に腹を立て、作家を軽視する風潮に涙ぐんでいたのを思い出す。

中島公園の彫刻と清掃活動

丸山 浩太（札幌市立中島中学校教諭）

札幌市立中島中学校の総合的な学習の時間では「環境を考える～地域との交流を活かした活動」というテーマで授業を行っています。

これは身近な地域の良さを新たに発見するとともに、親しみを持って自分たちにできることを考えてもらうことが目的となっています。この一環として、昨年度から「中島公園の彫刻について」というテーマで札幌彫刻美術館友の会の方々に講演をしていただき、後日、中島公園の彫刻清掃活動を行うという取り組みをしています。

今年度の講演では、彫刻や記念碑を映像で紹介していただき、歴史や作品の背景についても語っていただきました。生徒はいろいろな彫刻についてのエピソードに聞き入り、「過去には彫刻がいたずらされたり、倒されたりしたことがあった」という内容の時には全員が「大切な彫刻にそんなことをするなんて許せない」といった表情で真剣に話を聞いていました。その後、「最近ではいたずらされた彫刻にも心優しい市民によってお花が飾られたり、冬には彫刻にマフラーが巻かれたりしています」という話を聞き、安心した表情を浮かべていました。

講演後、生徒からは「前から知っている像だったけど、どんな像かはわからなかったから話を聞いてすごく楽しかった」「中島公園にこんなにたくさんの像があるなんて知らなかった」「これから中島公園を通る時にはいろいろな像に目を向けながら歩いてみたいと思う」といった感想が上がりました。

講演から1週間後の清掃当日は5つのグ

ループに分かれ、それぞれが担当の彫刻を清掃しました。今年度は3年生が参加しましたが、どのグループも一生懸命にぞうきんやブラシでていねいに彫刻を磨いていま



した。清掃後、ピカピカになった彫刻を見て生徒たちは「洗った後の銅像がすごくきれいになって嬉しかった。顔が微笑んでいるようだった」「服の袖がちゃんと再現されていてすごいと思った」「清掃はやろうと思ってもなかなかできないことなので今回このような機会を設けてくれて嬉しかった。充実した活動ができて思い出になった」
『母と子の像』を清掃したが、母親が子供をしっかり抱いていることがわかった。いろいろな彫刻にいろいろな気持ちが入っていることがわかった」と感想を話していました。生徒達は普段の学校生活ではなかなか見られない生き生きとした良い顔をしていました。

実際に彫刻に触れることで生徒達が自らいろいろなことを感じ取り、有用感や達成感を感じることができこの取り組みがこれからもずっと続いていくことを願っています。

岩内・ニセコ アートの旅を楽しむ 7月30—31日

木田金次郎・荒井記念・西村計雄各美術館で芸術満喫

後志管内に点在するアートの拠点を周る友の会の「岩内・ニセコアートツアー」が7月30—31日行われた。橋本信夫会長の出身地でもある岩内町を中心に積丹半島神威岬、岩内、共和を一望する円山公園をはじめ、宿泊先での海の幸にも酔いしれる満足の旅の報告を二人の参加者をお願いした。



「至福の旅を終えて」

高橋 大作

今年まさに木田金次郎生誕 120 年、有島武郎没後 90 年の記念すべき年でもあり、彼らの業績を改めて振り返ってみよう、そしてツアーのうたい文句にあった「美術館を訪れ、採れたての海鮮料理を楽しもう」に引かれたのが今回の参加理由だった。

一応、出発前に各美術館については調べてみたが、見終わって改めて事実は小説よりも奇なり、人と人の縁が人生を変えていくことがよくわかった。木田で言えば、有島と会うことがなかったら岩内に終生とどまることはなかっただろうし、60 歳で初めての個展開催、岩内大火での大量の作品焼失などを乗り越えて全力で画家の道を駆け抜けたことは素晴らしいと思った。また、西村で言えば、パリでピカソと親しい画商、ヘンリー・カーンワイラーに会わなければ画家としての人生の展開はまるで違っただろうと思う。いい勉強になった。私にとってバスツアーの縁が人生に何らかの彩を添えるものになったかもしれない。

「新鮮な感覚を受けたミュージアムの旅」

新谷 惇子

過去に何度か訪れたことのあるミュージアムだったが、季節、仲間が変わるとまた趣が変わり、学芸員の解説付きで作品の理解を深めることができた。岩内の市街、漁港は美しく、木田金次郎、西村計雄の芸術の原点を知ることができた。しかし、その美しい景色を一望に見渡せる公園から目の当たりにした泊原発は困ったもの。昔の美しい海岸線を取り戻してほしいと願うばかりだった。

宿泊した旅館の木の樽で作られた露天風呂での入浴は風情があり、思い出に残った。海の幸満載の夕食も美味で地酒とのハーモニーも良く、酔いしれた。

翌日、見学した工房では鉄を素材にした作品の数々とそれを生み出す鉄くずいっぱい工房の中で、無機質なものが感動を与える作品として生まれ変わる環境を初めて見、作品がいとおいしく親しさを増し、持ち帰りた欲望にかられた。充実した修学旅行だった。

友の会ニュース

新渡戸稲造顕彰碑清掃と 遠友夜学校フォーラム

札幌農学校 2 期生でのち、母校の教授として北海道開拓期の農業に貢献、さらに教育に恵まれない家庭の子女などのために札幌遠友夜学校を創立した新渡戸稲造博士(1862-1933 年)の没後 80 年を迎え、同博士の業績に再び光を与える動きが出てきた。友の会も一翼を担った。

遠友夜学校は現在の中央区南 4 東 4 に開校、1944 年(昭和 19 年)まで続いた。同校跡地には新渡戸夫妻の業績をたたえ、「新渡戸稲造博士夫妻顕彰碑」が建っているが、跡地の荒廃とともに顕彰碑も荒れ放題になっていることから、6 月 4 日、友の会の手によって顕彰碑の清掃が行われた。



作業は洗剤液で汚れを落とし、水洗いした後、高圧洗浄機で長年のアカを流し、丁寧にワックスをかけると見違えるように美しくなり、夫妻の表情にも明るさがもどった。

一方、新渡戸生誕 150 年を機会に今年 1 月、「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」(秋山孝

二会長)が発足、6 月 22 日、札幌エルプラザで設立記念フォーラムが開催された。友の会からも有志が参加、パネルディスカッションでは夜学校跡地を活用した資料館建設の計画に対し、「資料保管だけのものではなく、市民が利用し、新渡戸精神を全国に発信できるものしてほしい」との前向きな意見を表明した。(細川)

中島公園「かもくま祭」初参加 「彫刻たんけん隊」大活躍

中島公園で 6 月 30 に行われた第 7 回「かもくま祭」(中島公園児童館、札幌市こども人形劇場こぐま座主催)に友の会が初参加、アイデアを凝らした「中島公園彫刻たんけん隊」で子供たちの人気を集めた。



「かもくま祭」は地域の関係団体、企業などが協力して、子供たちにステージや各種の出店コーナーなどで初夏を楽しんでもらおうと行っているもので、同祭実行委員会から友の会へ参加の呼びかけがあり、参加した。

「彫刻たんけん隊」は公園内

にある山内壮夫の《猫とハーモニカ》など 4 作品を回り、ミニ解説と彫刻清掃体験、クイズなどで子供たちに彫刻への親しみを持ってもらおうというイベント。会員の呼びかけで親子合わせて 70 人が参加、彫刻の前に列ができるほどの人気だった。(長峯)

「アートサロン細川」オープン 豊平・福住の住宅街に

プロの工芸作家の作品などを展示する「アートサロン細川」が 7 月、札幌・福住にオープンした。

友の会会員の細川房子さんが元実家だった豊平区福住の住宅を改築してギャラリーとした。静かな住宅街にあるおしゃれな感じな外観で、1 階部分を展示スペース



にした。「母が長年住んだ家ですが、和室と洋間を生かして改装、造形、各種アートの展示、委託販売などに利用してほしい」と話している。サロンは豊平区福住 1 条 6 丁目 1 ノ 5。開店は火、木、土の午前 10:30 から午後 5:00 まで。冬期間休み。連絡は 011-374-5266 または 090-9435-5266(細川)、まで。

大通公園の彫刻案内板作成

《花の母子像》など2彫刻試作 公園管理事務所からの依頼

札幌・大通公園の彫刻に設置する案内板の作成依頼が同公園の管理事務所から友の会にあった。これまでにテスト版として《花の母子像》と《開拓の母像》の案内板＝写真＝を作った。管理事務所の上部機関である札幌市に認められれば年内に作品の脇に設置される。さらに、来年にかけて残りの彫刻の案内板作成に取り掛かる予定。



管理事務所から申し入れがあったのは7月。早速、プロジェクトチームを作り、デザイナーでもある猪股岩生会員にデザイン設計を依頼、さらに各種の資料を当たりながら作品解説の原稿作りを始めた。さらに、常田益代会員の夫君が米国人で文学者であることから夫妻に英文翻訳をゆだねた。

案内板はほぼ 40 ㌘四方で高さ 45 ㌘。盤面を 45 度に傾斜させ、緑色の地に黄色の文字を配した、読みやすいもの。さらに、右隅に友の会のシンボルマークと会のホームページにリンクする QR コードを付けた。

案内板のデザインをした猪股会員は作成の意図を「とにかく見やすさを第一に考え、特に目の不自由な人にも読みやすいように緑地に黄色の文字を浮き上がらせるようにした」と話している。また、橋本会長は「日ごろの友の会の彫刻清掃など地道な活動がこんな形で関係者の目にとまった成果は今後に大きい」と思いがけない要請を喜んでいる。

講義と実習で彫刻学ぶ

今夏も中島中に教育支援

札幌・中島中学の総合学習の一環として続いている友の会の彫刻実習指導がこの夏も7月1、2の両日行われた。

今年は初めに特別授業として橋本会長が彫刻の歴史と彫刻種類など彫刻芸術の基礎的な知識を話し、長峯慰子会員が中島公園の彫刻について解説した。

二日目は実際に中島公園で木下成太郎像などを友の会メンバー指導で清掃した。

生徒たちからは「今まで彫刻



に関心がなかったが興味を持つことが出来た」「彫刻をさまざまな角度から、自由な発想で見ることができると知った」などとの感想文が寄せられ、友の会のホームページでも紹介されている。

8月31日には昨年に引き続き、同校の前庭にある坂垣道の《協力》像の清掃実習を行い、生徒たちからお礼として中島中と隣接の柏中の合唱部による合同コーラスの披露があって交流を深めた。 (4ページに関連記事)

GPS測定器購入 彫刻地図作りに戦力アップ

友の会は彫刻地図作りの大きな戦力となる「GPS測定器」をこのほど購入した。

GPSは汎地球測位システムの略で、米国が打ち上げた衛星からの電波を受け自分の位置を知る機器で、彫刻作品の所在地を精密に確定することができるもので、地図コンテンツ作成に強力な武器になる。



事務局日誌

▼7月11日＝定例役員会(エルプラザ)6月の行事報告ほか▼17日＝桑園地区連合町内会文化部からの依頼で昨年に引き続き、中島公園での彫刻鑑賞ガイド支援▼24日＝西区の太田病院との連携でリハビリ患者の彫刻清掃を行う▼30-31日＝友の会主催の岩内後志アートツアー実施。一般参加を含め40人で美術館めぐり▼8月8日＝定例役員会(エルプラザ)大通公園管理事務所より彫刻案内文作成依頼の件など協議▼10日＝中島公園《鶴の舞》のコンクリート作品補修作業▼9月12日＝羊ヶ丘展望台《クラーク像》清掃、定例役員会(エルプラザ)

編集後記

▼水上武夫さんが今号の「風見鶏」で触れているが、彫刻の作者名がないがしろにされている例は筆者も時々、体験することでもある。彫刻の題名の揮号者の名前は麗々しく刻まれているのに肝心の作者名が見つからないなどよくある。小室達ではないがもっと作者を大切にしたいもの。作品は残っても作者が忘れ去られるのはなんとも寂しい。▼寒くなります。皆様ご自愛を。(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」 No.45

2013年10月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30)

011-884-6025

印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」45号 目次

自作自選 15 《冬の情景》	川名義美	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季 15 「ビュースポット」	松島幸和	2
風見鶏「小室達のこと」	水上武夫	3
寄稿「中島公園の彫刻と清掃活動」	丸山浩太	4
リポート「岩内・ニセコアートの旅」		5
「至福の旅を終えて」高橋大作／「新鮮な感覚を受けたミュージアムの旅」新谷惇子		
友の会ニュース		6-7
新渡戸稲造顕彰碑清掃と遠友夜学校／「かもくま祭」初参加／アートサロン		
細川オープン／彫刻案内板作成／中島中彫刻清掃指導ほか		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■ハルカヤマ・サテライト 9月14日[土]～11月17日[日]

「ハルカヤマ芸術要塞2013」と同時開催で、同展出品作家約70人の商品を展示する。また、同時に記念館で関連企画を開催中。

■施設整備のため 11月18日から来年1月17日まで休館

■コレクション展「裸婦研究」2014年1月18日[土]～5月11日[日]

本郷新が数多く手がけた裸婦像をコレクションの中から選りすぐって紹介する。

同時開催「In My Room」展示室の一室を会場に若手彫刻家3人(高橋知佳、更科結希、町嶋真寿)の個展を1か月半ずつ開催。

記念館

■小企画展②「本郷新と春香山」 9月10日[火]～2014年4月13日[日]

ハルカヤマ・サテライト展と連動して本郷新と春香山の関わりを紹介する。本郷新が春香山のアトリエで制作したテラコッタ作品、石狩浜の風景を描いた油彩画、アトリエの写真などを展示。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください。

<http://sapporo-chokoku.jp>